『歳旦牒』翻刻（二）

愛知県立大学稀書の会

本稿は「『歳旦牒』翻刻（一）」（『説林』第五十九号　平成二十三年三月　愛知県立大学国文学会）に続くものである。前号に於いて、本来挙げるべき解題を掲載しなかったことをお許しいただきたい。そこで、本稿で略解題を示し、翻刻については前号の続きである十三丁表から掲載した。なお本稿の成果は、前号に引き続き本学「稀書の会」に於ける検討の結果である。その指導には、国語国文学科久富木原玲教授、小谷成子教授、歴史文化学科大塚英二教授があたった。なお会の参加者は以下の通りである。

井上純二・大川のどか・狩野一三・久我美咲・熊澤美弓・栗原礼奈・鈴木めぐみ・名倉ミサ子・横山知世（五十音順）

【解題】

本書は元禄十一年の歳旦牒であり、既に市橋鐸氏『愛知女子短期大学古俳書目録』（昭和二十五年十二月　愛知女子短期大学）によって書名を「元禄十一年歳旦」とし、「蕉門の歳旦牒で、京・伊勢・大津・膳所・江戸等にわたつている」と紹介されている井筒屋庄兵衛版の刊本である。しかしながら『国書総目録』及び「日本古典籍総合目録データベース」には、「歳旦牒芭蕉門人元禄戊寅」として天理大学綿屋文庫所蔵の写本のみが報告されている。但し綿屋文庫蔵本については、『綿屋文庫連歌俳諧書目録』（天理図書館叢書第十七輯。天理図書館編　昭和二十九年四月　天理大学出版部）により井筒屋庄兵衛版の写真と影写とが、また『綿屋文庫連歌俳諧書目録第二』（同叢書第三十五輯。天理図書館編　昭和六十一年六月　天理大学出版部）により再影写本の所蔵が報告されているのみである。そのような状況の中で原本と考えられる県大本を改めて紹介し翻刻することは、本書の研究の進展に寄与することになるといえるであろう。なお本書は【書誌】の項目に示すように題簽題に「歳旦牒芭■門人」（※■部判読不能）とあり、また巻頭題に「元禄十一戊寅年」とある。稀書の会では題簽題により、書名を『歳旦牒』とした。

【書誌】

全一冊。全五十一丁。刊本。

表紙　原装素色無地。13.7cm×19.6cm　朱筆・墨書による書き入れあり。

題簽　中央双辺「歳旦牒芭門人■」（刷）9.2cm×6.6cm　一部剥落あり。

巻頭題　「元禄十一戊寅年」。

字高　11.6cm前後。

行数　不定。

柱刻　第一丁より「ふうこく」（第一丁）、「らんせつ一」（第二丁）、「ろかく」（第三丁）、「七ゑひす一（〜二）」（第四〜五丁）、「江戸」（第六丁）、「神一江戸」（第七丁）、「神二江戸」（第八丁）、「江戸さんふう一（〜四）」（第九〜十二丁）、「いうとう一（〜五）」（第十三〜十七丁）、「はんせんぜ同壱」（第十八丁）、「はんせんせ同二」（第十九丁）、「ていそく一」（第二十丁）、「とレう一（〜六）」（第二十一〜二十六丁）、「シヤラ一」（第二十七丁）、「柳後一（〜二）」（第二十八〜二十九丁）、「ふうちく一丁」（第三十丁）、「ふしやく一（〜四）」（第三十一〜三十四丁）、「支考一（〜二）」（第三十五〜三十六丁）、「一（〜十五）タンユウ」（第三十七〜五十一丁）。

印記　一丁オ「藤」（朱、陽刻、単枠、2.1cm×2.1cm）。

「普／風」（朱、陽刻、単枠、1.5cm×1.5cm）

判読不能一点。

六丁ウ「普風／蔵書」（朱、陽刻、単枠、2.5cm×1.9cm）

二十八丁オ「柳／後／苑」（刷印、陰刻、2.9cm×2.9cm）

その他　五十一丁ウ　墨書の塗りつぶしあり。

裏表紙中央　罫線の書き入れあり。

三十一丁オの一句目「歳…夜　支考」とあるように読めるが、綴じ目が字にかかっているため判読困難である。

【凡例】

翻刻にあたっては、底本にできる限り忠実であることを原則とした。但し、読解と印字の煩雑を避けて、次のような処理を施した。

一、漢字は現在通行の字体に統一した。異体字や略字なども通行のものにした。但し、嶋・哥・躰・云などはそのままとした。

二、誤字、当て字、送り仮名、仮名遣いなどは底本通りとした。

三、合せ字は開いて表記した。

四、改行そのほか字配りは、必ずしも底本に従わなかった。

【翻刻】

〔十三丁オ〕

元禄戊寅　■垂葉堂

青帝

万歳が内裏見て来た写シ哉　游刀
春の重(ヲモ)りの台所祖父(チヽ)　昌房
野も山も若艸に成真鴨色　探志

蒼天

舛形や今朝鶯の幅(ハヽ)を取　探志
勢(イキヲ)て済す町の水あび　游刀
雪を消す雨の手際を見せぬらん　昌房

東君

三方の海老の赤ミや初日影　昌房
ゆづり葉を摺肩衣の廉(カト)　探志
薄霞上使の御請申されて　游刀

〔十三丁ウ〕

韶光

山家まて時宜の満たる初日哉　筏雪
牛をくらへにつなぐ梅かへ　松滴
帰る鳥鶴に指図を受ぬらん　州千

鶏日

大福や花を待気に成にけり　州千
霞に空もうるほふて来る　筏雪
舩の名の河霧丸に残る雪　松滴

改旦

鳥追の祝儀揃ゆる要(カナメ)かな　松滴
こぼれた銭をつかむ福菊　州千
凝解に道の濡(シル)さもにきハひて　筏雪

〔十四丁オ〕

初陽

蓬莱の行義崩さぬ注連の中　回廳
裾のからげを習ふ若草　汀芦
橋杭にくるりと小鮎輪を掛て　畔路

上陽

歯朶穂長論もなき日やほこが牛　畔路
篠に粉雪の正月をする　回廳
そろ〳〵と里へ霞の顔だして　汀芦

大簇

乗初や松を摺合矢橋舟　汀芦
機嫌まかせに狂ふ鶯　畔路
我界(ガカイ)程すき田の埒を明ぬらん　回廳

〔十四丁ウ〕

桃符換へ来テ

販ハス二市店ヲ一

初東風やおのれ浮る同紙燕　緣督堂野径
七種摘の揃ふ高土手　正秀
櫓拍子もみよしの房も長閑にて　牝玄
上日
乗初や畳増りの鞍の上　翫月堂牝玄
春より雪も烏帽子石を付　野径
誉ホメらるゝ健スコヤカ者と花の旅　正秀
晨蕗
門松にしかも来露の日和哉　青節堂正秀
又有飛脚の急く節前　牝玄
かし鳥の種さの物真似陽炎に　野径
〔十五丁オ〕
聖祝
初空の雲晴行や我も斯カウ　淡水子
引附
元旦
つり合の籠て広し松餺　吹萬亭胡故
大小を娘に問れよ　花の春　大津知月

よしあしの真中つかめ日の初　支幽
青竹の神カウ〳〵しさよえ方棚　遅望
詞書略す
藪医者ハ典薬に成初日かな　朴吹
蓬来や中に直して謡初　松本楚江
乗初や山のちらつく海の底　雨汀
〔十五丁ウ〕
礼するやもつて開て三ヶ日　麻三
振向て摩谷を拝むや初日影　愈令
万歳の子を引付る徳意かな　女年平蔵
参宮の気に成けらし明の春　杏雨
謡初や子役て済す我祝儀　葉竹
大小の吟
かさり大二五あれ八九霜十二神　成昌
蓬莱に苦ミ替らぬ野老哉　宇多氏
練貫の若水星にかつきけり　光林
梅そはや咲ておとミる日の初　貞木
名物の鮒のひれのす初日哉　親信
恒例や年玉提て釜の肩　南笠元伸
それ〳〵に祝ふ言葉の初日哉　大萱柳雨

〔十六丁オ〕

庭竈餅あふれとや山折敷　野路貞行
節の日や普代出揃ふ長屋門　頼国政春
片町や舟の勢を門かさり　松本舩彦
ミがきたる屠蘇の長柄や明の春　重直
献立は我れか得ものや得方向　久勝
袖妻のしつけ芋取やきそ初　江戸　女夜楚
帯つれやとそのきハつき襟もよう　同女艶糸

海山隔たれとも
たかひにかよふ
心から
春の賀をあふづけにせよ帰る雁ミん
我門も出来映したり伊勢の海老　女紺羽

灰頭土面ハ我常にして
ことさら回家の春に隣事四年
鋤初や鍬大将の門の前　僧丈艸

〔十六丁ウ〕

年境
節分や鬼もあざむく四の国　淡水子
歳尾之吟

年もはや牛の尾程の手寄哉　京去来
近江をハ見懸て雪の友鳥　酒堂
行年を猶追立る雪吹かな　さか野明
売買に成てあつたら師走哉　同為有
行年を蹴ちらかしけり市の人　京風国
節分や懼ものなしふたり住　さか安女
美濃紙や一重ほのめく除夜の梅　大阪車要

年内の立春
木地ふちに替る座敷も廬路の空　酒堂

〔十七丁オ〕

いそ〳〵と廻れ師走の水車　探志
棒鱈の腹ふくれけり暮の市　遅望
昏の市雪も諸共よごれけり　汀芦

文質片ならさるを君子の
いさをしとす清貧魂に
疵つけす　野径
骨しほり解や扇の師走舞
くハほうは
寝てまて
衣配人様よしや尾長綿　女紺羽

日々放下焉諂曲猶増長ス
煤払をしても身にある埃(ホコリ)哉　游刀

〔十七丁ウ〕

鴛ハ師走の果に羽を
ならへて昼寝をし
鷗(カモメ)は友を誘引て
あまりに遊ふ

師走色しらて遊ふや鴛鷗(ヲシ)　正秀

〔十八丁オ〕

戊寅　膳所

元日

献立や松の内より鯛つくめ　潘川
お箪笥(タンス)町ハ殿で春めく　臥高
自漫なる器量を雛にこしらへて　里東

同

参宮の小幡とまりや明の春　同
髪月代(サカヤキ)のかすむ川はた　潘川
薄綿て花おもしろき時分也　臥高

同

つつきりの四畳にかこへ庭竈　同

正月の気て何もしまらぬ　里東
振廻し奇特に見ゆる梅咲て　潘川

〔十八丁ウ〕

試毫

新ラしき心なれとも老の春　淡水子

鶏旦

明て今朝門なる竹の青ミかな　酒堂
家普請をするはつにして門かさり　胡故
三ヶ日過たら宿て蕎麦打タン　落荷
万歳や古ヒて見よしほとけ言ト　汀鴉
一むれの小松長ヶなり弓始メ　喬枝
あれきりの拍子也けり万歳楽　暁白
初かすみ幾たぐりほと都より　白羽
年売や花に明たる苔むしろ　君山
湖のくもてにかすむ初日かな　椐道
おかしけを春の拍子の御慶哉　川支

〔十九丁オ〕

蓬莱に出たられにけり娵の尻　鷹臣
あかねさす給酔屠蘇や千代の春　軒正
蓬莱に積たし小にし小蛤　船曽

上下て梅見にゆかん屠蘇機嫌　民江

としのくれに
煤の湯を流しかけけり雪の上　里東
掛乞や星いた〳〵いて小関越　暁白
鯛ハかけられて
かさりとなれハ
鰤ハつゝまれて

〔十九丁ウ〕

客待やとの楽となる中に
売あまる鰈の目せハし年の市　車要
太神宮にまいりて
其かへるさま申し侍る
神をうる雪に岩戸の道造り　潘川

〔二十丁オ〕

戊寅歳旦

題四隣

北山も青み出るや花の春　泥足
餝の風のわさ〳〵と来ル　淡齋
鏡月弓六張をすかゝきて　丹野

同

酉東まんまと春の朝哉　同
水主の御慶を受る船頭　泥足
一村を松かふとふて霞らん　淡齋

同

若水に番の星の光かな　同
髪ゆふ間去年の蝋燭　丹野
梅柳足軽達の持参して　泥足

〔二十丁ウ〕

鶏旦

灰頭土面ハ我常にして殊更
田家の春に隣しふと四歳
すき初や鍬大将か門の松　丈艸
万歳か内裏見て来たうつし哉　游刀
万歳や袋にあまるかゝみもち　可供

守歳

煤(スス)はきや裏へいつれは梅の花　淡斎
銭のなき師走の今日になめり川　柏原暁鷹
年のくれ万歳共かいひ合せ　正見
雪の日をおされて見はやとしの市　丈艸

挑灯で手紙よむ也としの暮　泥足

観念

白張の屏風にむかふ師走哉　丹野

歳旦

門松にしかも甘露の日和かな　正秀

〔二十一丁オ〕

元禄十一戊寅稔

如レ斯ノなりと聖師のいひも

いまなむ松とももとして

の丶しりありくのさま

何事にか侍らんはて

正月也

除眠

化て出もの丶はしめや厄払　吐龍

老陰

湖もまつそのぶ舞で年の暮　同

生天仏鮎漓

頓飄仁踣レ雪ニ　燕吾

〔二十一丁ウ〕

載陽

佐保姫と見れは夜明や残る星　木志

風双調に腮なでゆく　正秀

百千鳥禾な憂世と囀て　燕吾

其二

ふる言の梅におかしや辛螺肴　同

被官がすくに年男なり　吐龍

鎌入ぬ深草山の網霞　正秀

〔二十二丁オ〕

其三

元日や胡桃のあふら鼻油　同

畳長閑にくほむゐたひら　木志

花の雨虻の宿かえ藤咲て　吐龍

祀曛

草蘚ほる雪の瀬踊やとしの市　木志

水船も仕舞難波やとしの暮　正秀

〔二十二丁ウ〕

試穎

飾乗杜子美が管をこ丶ろみむ　夕陽観角上

東風にほろりと落る松笠　吐竜

雨を乞隅より虹の立初て　仙左

第二

織姫の立舞へくや四方拝　釣玄堂仙左
雪のなたれを削青柳　角上
喰さしの普請に春は医者止て　吐竜

〔二十三丁オ〕

第三

御慶哉愚に見ゆる人の顔　吐龍
霞ほの〳〵霞ほの〳〵　仙左
京の水肥て越路に帰る雁　角上

臈晩

大名や梅に歳暮の火をともす　角上
四ツ橋の扨さはけたる師走哉　仙左

〔二十三丁ウ〕

祝辰

万歳や紅葉しに鳧龍田川　斝龍
霞の洞にしかる長子　吐龍
燕の水蒔うちは羽反して　左龍

其二

元日ハ下戸ならぬそ若恵比須　同
ぎめ寶引のさしは三尺　斝龍

宇治の春やかて番茶の杜鵑　吐龍

〔二十四丁オ〕

其三

黛に梅散恋の七日かな　同
競香より名家嵩　左龍
陽炎に鈿螺鞘と埒明て　斝龍

回眠

優女に斠渡すや年忘　斝龍
戯女や指も十あるとしの暮　左竜

〔二十四丁ウ〕

魁祝

若水や家老に汲す旅の宿　江州大溝恒武
貌のよく似た国の万歳　同
春霞京の山〳〵裏なくて　同

肇暁

蔵開き御馬もまいれ米車　加陽金府之住景子
遠慮なくあくびをせはや今朝の春　木節
いきらはや父母もては花の春　乙列
初夢にむかしの京やいまの京　百〻
千代の春道具の鞘も虎の皮　正心

〔二十五丁オ〕

おしあふて雀よろこふ初日哉　錦江
初鶏や内侍所のすゝ音　濯枝
太箸のふとさか見たし小人嶋　一露
宝引や声の高ひが里もとり　政之
初空やこはひ鐘馗も国の神　柳織
初東風や手織の絹の裾のふき　楚江
年玉やあふきひろけて扇子箱　今井有一
つね〳〵と太箸かろき朝かな　堅田鵞睡
鳩双御門も高し初日影　西龍
唐土やとら嘯て門の松　若龍
ゐさり松取つき立や着衣初　女石
伯父〳〵といひさすよ事謡初　文六
鰊鯑子は濱の真砂のためし哉　冨勝

〔二十五丁ウ〕

鶏声や恵方棚にはやまを請　直高
曙や物あたらしく水若し　洞子
橙や志賀の郡のすぐれもの　安心
紅裏や薬といふて着衣初　且長
末広や親のかげ添ふかゝみ餅　江戸安勝

初夢や梅を見つけて稲荷山　正春
二親の貌あたゝやかゝみもち　円水

元日

大眠や我なす事のはしめかな　玉堂
息災に咲一輪の梅　吐竜

〔二十六丁オ〕

歳暮

青鏥て年は暮鳧鐘の音　玄甫
歯朶とりと一度に鴨の羽音哉　智月
比叡愛宕雪やこんこよ年のくれ　百〻
うそつひたことふれにくし年の暮　政之
節分やおには消行にしの海　西龍
節分やおにはへかこの大豆の音　若龍
刀より棒になれたる師走哉　佐倉氏小作
三宝の燈火匂ふ師走かな　柳織
干鮭にふり〳〵つなく師走哉　円水
こしの夜や猫よ火桶よ年の暮　正春
鰤木綿かえてもよしや年の暮　正次

〔二十六丁ウ〕

載尾

身をおもふとき先人を知となん
洛のさかひにて悟り侍事
人形店の中に筒井がとしわすれ　乙列
　徳不レ孤師走　燕現
なにや栢かやさけぶ竪横　木志
衣賦り幸丸に蘭の漿　吐龍
　ゐつゝ屋庄兵衛板

〔二十七丁オ〕
　寅のとし
　ふるとしあつまに
　ゆかん事をそゝろに
元旦　おもひたちぬれと
　さはりてやみぬ
よせて見ん旅のこゝろを初霞　百々子舎羅
　おめすをくせす鶯の滝　芝柏
蜂の巣に此ころよりも漏当て　諷竹
　歳尾
夜あるきや年のなこりの雪か降　舎羅
　炭のにほひのとまる懐　諷竹
しからるゝ事を小哥の返るにて　天塞

〔二十七丁ウ〕
　元朝
小袖着て春の香のする朝かな　天塞
おしなへて世話のない世や日の初　三尼
立春や袖にたまりし熨斗の切レ水　玉
朝ふかし俳諧ならはえ方棚　諷竹
ゆるやかに年を重て五千両　古つ
　歳末
行雲や木末によする寒ンの明　芝柏
人形と芋つかはるゝ師走かな　天塞
此道に塵ものこすな年のくれ　諷竹
　京寺町　井筒屋庄兵衛板

〔二十八丁オ〕
　戊寅歳旦
　柳後苑連衆
　（刷印）「柳／後／苑」

〔二十八丁ウ〕
　元日
吉岡と名もゆたか也着衣始　予章台吾仲
　皆春永にあそふ相談　范孚

里〳〵に茶摘の太鼓打立て　子直

其弐

石川の澄きる道や大飾　達観齊呂物

薄の付たるあら玉の宿　吾仲

出替の前垂かづき降出して　范孚

其弐

正月に引添て来る柳哉　崔九堂蒙埜

おどりい空にむかふ鳥追　子直

暖に蒲団着せたる馬肥て　吾仲

〔二十九丁オ〕

試毫

元日を囀り出すや百千鳥　支頤亭范孚

蝶獅の膳のまハりや初日影　只旦窓子直

回臘探題　五句

分前ハ棚へあげてや年忘　子直

入月や煤はく場(ニハ)の大蕪　吾仲

餅突や覗ていぬる牛つかひ　呂物

節季候も糟に酔たる勢哉　范孚

物ことの頬を臾也としの暮　義聖

〔二十九丁ウ〕

歳旦

年玉は女房の世話や宿の春　素毫

君か代や鍋取公家も花の春　陶後

めつらしい鳥も海鼠もけさの春　楚審

初鳥や鳴たつ宿の烟出し　子靖

大ふくや松と竹とのむかし釜　魏岐

紅粉歯黒も候に烹の初日哉　女堇牀

青極にふしくれたゝぬ飾かな　逸粋

京城迎春

人並に訛り廻て御慶哉　肥後八代買廬

年のくれ

同宿の臍くり銀も年わすれ　月次会庵主

行年や奉行屋敷の塀覆ひ　吾仲

井筒屋庄兵衛板

〔三十丁オ〕

寅の年

元旦

朝ふかし俳諧ならはえ方棚　槐之道諷竹

むめほしいわふ顔の福(サイハイ)

手近くの畠に麻を蒔かけて

元日

鶯のなしみのえだや朝開キ　保直
若水や杓も茶筅もおろし立　荘人
はや年の立とて梅に鳥の声　東明
元日やずいと延たる木〻の枝　芙雀
門松の木末より先初霞　附専
菊のつらものとけき朝哉　焦桐
大ふくや右にかまへる硯紙　伽香
よせて見ん旅の心を初霞　舎羅

〔三十丁ウ〕

元朝

今朝ハ先起るといふも事初　因之
足もとによい事多し初霞　羽竹
残たる雪もめてたき朝かな　其道
浮言(ウソ)いふは常の事也今朝の春　能親
てうどけさ筈を合すや福寿草　夕凉
かいなみに梅が光るか今朝の雲　武直
足引の山家のおくもけさの春　永度
樹(キ)ハ老て今年も同シ花の春　莉花
初霞とこやら梅もにほふ也　嵐臼
蓬莱に常より雲も閑なり　伴好

としのくれ

薄色の梅迄さいて年の末　東明
元服や餅をつくやら年のくれ　芙雀
かす祢宜の尚形おかし年のくれ　能親
わたし守とこやらかすむ年の門　保直
此道に塵ものこすな年のくれ　諷竹

井筒屋庄兵衛板

〔三十一丁オ〕

元禄拾一歳　諷竹門人

歳旦

何所も嘸こならも今朝の初霞　風薫子芙雀
さして苦のない鶯の歌　武在
如月の鼠そろ〳〵匂い来て　嵐臼

同

戸障子を明れハ今朝の春の色　嵐臼
つま乞か猫の耳がそば立　芙雀
永キ日に商イことのなり寄て　武在

同

一夜にていつも替れと今朝の春　武在

普請の分も仕廻ふ青極　嵐臼
鳫(ウソ)鵠(コマ)鳫も花に盛や住すらん　芙雀

〔三十一丁ウ〕

元日

朝ふかし俳諧ならハえ方棚　諷竹
もの申のすがた尊し門の松　悲回
おもふ図へ持てまいつてえ方棚　イセ里角
鶯の主ハ替れどけさの春　ヤマモト誌貞
木ハ老てことしも同し花の春　莉花
足ひきの山家のおくもけさの春　永友
目出たさや霞はしめて今日の空　萬立
万代や下〳〵迄もすハり鯛　塩風
初夢や桜のめがい見に立ん　女
つき合の皆顔若しけさの春　萍浪
よせて見ん旅の心を初かすミ　舎羅

〔三十二丁オ〕

歳暮

夜あるきにとしの名残の雪がふる　志やら
おなしものとりやりするや年の暮　武在
行年や声はり上て扇うり　萬立
帳面をけしてよろこふとしのくれ　塩風
塩鯛のかしらそろふやとしの暮　嵐臼
此冬ハ思やりにてくれにけり　永友
此道のあくたのこすなとしの暮　諷竹
落ついて長閑心やとしの暮　芙雀

〔三十二丁ウ〕

芙雀亭にて

としわすれの

吟

歌仙

燭寸

しら雪も降や冬梅冬椿　諷竹
鶏ともの寒き片隅　芙雀
代り衆御借羽織を着揃て　舎羅
さう有さうな噺也けり　武在
うろたへて月にや鹿の鳴ぬらん　嵐臼
ぞんそ〳〵と秋ハ暮行　筆

〔三十三丁オ〕

物おもふふりにて筆もなけやりに　雀
袴もぬがて手まくらをする　竹

紙文庫とりあらくれは分か立　在
きついたばこハ一ふくてきく　羅
四五厘の見込ミに銭を買まハし　竹
元服まへになをす物こと　臼
薄月に霰も消す吹散て　羅
去年の瘡(クサ)の跡をかきむく　雀
春の野に持せし樽の明したい　臼
東風吹度にしめる板敷　在
口〳〵に花の盛を待かぬる　雀

〔三十三丁ウ〕

くら〳〵に往て朝の湯に入ル　竹
生(ネヲ)こづむ籔の間から人の声　在
杖(ツエ)かへられてよほどミしかい　羅
時折の物とて淋し露しくれ　臼
後の彼岸に種の約束　雀
霄〳〵に隙なき月の舟遊ひ　竹
うすよこれたる臾て呑喰　在
八九軒峠の家もそのまゝに　羅
とり立すれハ伯父やおば様　臼
廻状につらりと点ハかゝりたる　雀
うけとりにくい年のせんさく　竹

〔三十四丁オ〕

見ることのならて娘を恋しかり　在
せつ〳〵文の便りしらるゝ　羅
木(ネウ)〻の葉の散ハ跡から掃集　臼
皆〳〵舟の埒ハ明ぬる　雀
塩糀今度の味噌ハよいかげん　竹
のこぎり借て花生を切ル　在
凍解て草履ふミ込塀の陰　羅
心〳〵にほめるうくひす　臼

ゐつゝ屋庄兵衛板

〔三十四丁ウ〕

（白紙）

〔三十五丁オ〕

ひいとろのあらしや一夜早の春
　師走の山の雪の白妙　水甫
柱売大原の馬につれたちて　反朱
　其二
是見よと師走の梅ハ咲にけり　乙由

紙子の袖の喰ハす貧楽　唐底
木兎と鳶とはのかぬ間から　支老

其三

物申に一日寒し年の暮　水甫
古禮の仕舞の早き水風呂　仄止
座布掃時に手紙をよんてみて　唐底

〔三十五丁ウ〕

其四

餅聞に出るや師走の風羅人　反朱
千鳥にわたる源川の橋　乙由
元禄の丁丑はめてたくて　仄止

其五

餅好の顔にそなハる師走哉　唐底
大黒はしら寒きともしひ　支考
門たゝく音に合点の行かねて　乙由

其六

此中は御目に掛らぬしハす哉　仄止
為其茶ハ何と年のつめ際　反朱
分限者の門ハかと程雪降て　水甫

〔三十六丁オ〕

其七

有明の餅におさまる師走哉　呂叟
梅の華咲冬の御方　支考
侍に背中の雪を拂ハせて　団友

歳暮

草庵へ煤掃竹の無心哉　柳玉
雀まて節米春の祝義哉　柳子
皿売やこまる師走の年の尻　幾勇
節季候のきほひ懸るや門かまへ　望左
生替て梅一枝やとしの暮　菖蒲
祖父はゝと子の云出すや年のくれ　呂諧
夜嵐のないて師走の鳫(カ)哉　季詵
其方ハとこに居やるそ衣配　賀枝

歳暮

〔三十六丁ウ〕

遠〻と手振持て来歳暮哉　露川
かしらの雪をこほす葉の下　素覧
梟にかゝる住居をわらハれて　東推
同
目を突に出たか師走の棒かつき　同

羽根のはえたる際の買物　露川
糠星も簸る斗なる風吹て　素覧

同

雪隠の燈に静や年のくれ　同
霰のあとの闇の不拍子　東推
此関に柴積船のとめられて　露川

ゐつゝや庄兵衛板

〔三十七丁オ〕

戊寅歳旦（ママ）

只さへも見るへき山を今朝春　団友
もつてひらいて鶯の鳴　芦本
咲ミたす馬場のさくらの右手妻手　空牙

二

長岡もいまにめてたし松かさり　芦本
畠の井戸のはやる若水　空牙
やかて行支度に丁のあつまりて　万里

三

とし玉と見えてたもとのふくれたり　圭斯
二人機嫌にあたゝかな空　万里
大鍬にひらり〳〵と耕て　芦本

〔三十七丁ウ〕

四

とし切に風も和波（ナイ）たる夜明哉　万里
里から餅をすハる橋守　団友
雪残るみちハむしろにかたまりて　圭斯

五

雲水の身もふとるへしはなの春　空牙
柳に雨の降次第也　圭斯
田の蛙昼よりましに夜鳴て　団友

歳旦

きのふ見た人もなるほとはなの春　呂叟

同

何いふもミなあたらしき花のはる　武固

〔三十八丁オ〕

三物

先ひとつよきものみたり朝かすミ　起芳
香にしいらるゝとその盃　寸陰
雉の声又かん〳〵と照出して　白歌

同

見て来たに二見か浦のけさの春　同

此正月の日和まてよき　起芳
御座敷に久しう居れはぬくたうて　寸陰
同
只居ッて柳なかむる朝哉　同
ひろけた餅に梅の花散　白歌
竹箒雪の雫をひきすりて　起芳
〔三十八丁ウ〕
日始
今朝の日の慥にぬくう成にけり　了麁
袴着なから梅か香に寄　素甫
若くさを不性なものゝ掃に出て　逸草
又
日の春や鏡にむかふ船の者　同
節衣に帯を添て取出ス　了麁
朝起に蔵のまハりハ東風吹て　素甫
又
青海や松から難無日のはしめ　同
きのふの雪かはる風に成　逸草
鶯のおもしろさうに声あけて　了麁
〔三十九丁オ〕
三物
蓬莱にまた橙の葉も青し　万呼
礼人につれてはいる万歳
朝曇鶩も春に遊らむ
同
肩のゆき長き節衣や民の春　一止
空のんとりと晴るゝ淡雪
紅梅のにほひ窓から吹込て
同
鯉売のはや来て居るや門かさり　賀枝
空うき〳〵と正月の雪
山道の笠も霞に見え初て
〔三十九丁ウ〕
三物
年頭や跡から来るも親子連　耕耘斎
組蓬莱にかさる風流　囂〻子
日のうつる庄屋も亭の長閑にて　大朴人
同　同
花に発句けふより三月九十日　耕耘斎
広ふかまへた庭の春風

駒とめて酒買ふ里ハあたゝかに　囂〻子
　同
ねふたさをわするゝはるの旦哉　同
　またくらいのに鶯か鳴　大朴人
直垂のたもともむめの香に入て　耕耘斎

〔四十丁オ〕

　歳旦

よき事を揃て申せけさのはる　東北
　律儀な顔に御慶あしらふ
柳見る日当ふくりのあたゝかに
　同
節事や打霞たる台所　雀子
　折敷の鯛にかふせぬる　朶歯
鶏ハ今日のたまこを産て来て
　同　吟之
泥亀も出ありく春や夫婦つれ
　松の寒さもうらゝかになる
鵺て見る花のつほミに難もなし

〔四十丁ウ〕

　三物

霞より此方(コチ)に松あり門の春　路友
　今朝ひらいたる梅に鶯
あたゝかに雪の仕舞ハ雨降て
　同
装束のたゝしき海老や門かさり　加之
　貫入(ヌキレ)手なから鳥追かくる
朝かすミとこしもおなしことくにて
　同
万歳やこちのおやちにいきうつし　寐覚
　只大ひらにかさる松竹
はる風に広間の皷打出して

〔四十一丁オ〕

　福鼠

歯かためや臼のほとりの福ねすミ　寐覚
　たん袋より初夢の夜着
横に降雨に柳ハまかされて
　同
鼠から湯殿はしめや尾の雫　同
　今朝の礼人の梅を誉レ
八百屋まて折敷をかさす春雨に

歳旦

聞及ふ団友丈へ御慶哉　桑名只計

なを永日にぬけ参して

梅の香にふハりとかけて干羽織

〔四十一丁ウ〕

歳旦

礼ハ自(ヨリ)二兄(エ)一方(ハウ)一友　松本玄甫

尾ひれもりんと盆のおし年魚　吉野衆

広掾にちり込梅を掃ためて　有馬衆

同

錺(リハ)竹―苞(アツマリ)松―茂ル　毛利一管

朝日に声のふとき鴬　近江衆

山―々霞一―跨(マタキ)　玄甫

同

鶯ヤ也　起ス予レヲ者ノカ　藤原素庵

今朝のんとりとあたゝかな年　有馬衆

此ふねに仕合よしと浦の春　長門衆

〔四十二丁オ〕

同

遠くからちよつとうなつく御慶哉　有馬衆

門―トハ玄ム屋(ヤ)―並ミノ松　玄甫

黄(ウク)―鴉声(ヒス)後―上(シリカリ)　一管

常ハ二見の塩やも

同　同しいそかしさなる

もの丶今朝ハくしの歯を入て

元日は奇特にひかるあたま哉　近江衆

屹(キツト)　居(スハル)　鏡　一―重(ネ)　寿坐

小普請も大かた春にきハまりて　吉野衆

同

一―しく貫ヌク竈(カマ)―神ノ柳　寿坐

門をはいれは柳梅か枝

頑(トヒアガル)―燕汚(カス)二晴―着(キヲ)一　素庵

〔四十二丁ウ〕

同

冥(ク、モリ)　含ム芽(シヲ)―弱(カ)―餅　莫彦

門ハとふから物の売物　常奚

当年ハ花見ハ京をあてにして　同

同

寿ス五剖(ワク)一ヲ屠―蘇　歓伯

節に柳に歩く分前　同

近―在雹村―消へ　同

同

しらぬ家つまつく品に御慶哉　盧教

通リ理ハ早羹―時　同

堀ばたの雪もそろりととけ行て　同

〔四十三丁オ〕

御祝儀

元日にこらへ袋の笑哉　纖斎

万歳の囃子ハ奥の笑哉　炉歩

とし男またねふさうな笑哉　季重

大竈の餅見て嫁の笑哉　蟻武

鳥追かとくとともつて笑哉　無才

元日に大根をみて笑哉　同

初夢に手ひやうし打て笑哉　勝之

大海老かさりて門の笑哉　口出

歳旦

戸を明て見れはめてたし門の松　勝之

隣からゑほして来るや今さの春　乙東

〔四十三丁ウ〕

三物

正月ハ結句隙なきあるし哉　桃牛

節事するも家の役也

鶯の居内に早ふさへつりて

歳旦

悦口ハスヲ屠蘇―酒　元知

去年より文字のふとき書始　吾子

照渡る空へもむめやにほふらん　同

同

松かさり町の涼しき始哉　ミナト春夫

とし男から朝起の勝　遊汀

直のならぬ白魚籠に手を入て　同

〔四十四丁オ〕

同

たつくりの尾かしらふ雑煮哉　ミナト若水

傍輩つからと節衣取出す　無尤

春の水釣瓶の縄もやハらきて　若水

同

とし明て雪踏の音の長閑や　無尤

羽子はしまれは人の集り　兎翁

花こゝろほれ〳〵酔に鬢撫て　春夫

同

鶯よ伽羅に名もあり今朝の声　同

松杉の絵に餅すへる也　無尤

五節まて花咲町にはさかりて　兎翁

〔四十四丁ウ〕

三物

青柳の物にかまハぬ旦かな　ミナト兎翁

にほひの出たる梅の若やき　春夫

雪国の雪の内からきし鳴て　無尤

同

え方より今朝ぬひて来る若菜哉　可由

かさりの内は物の吉例

地諷の長閑に次へくつろきて

同

百性も花に成けり四方の梅　枝鳩

くさの根をふむ道の雪舞

朝狩に居たる鷹の羽を撫て

〔四十五丁オ〕

同

台処笑に成や庭竈　釣隠

とそのにほひを強て振廻　遊汀

山桜咲かは便の筈をして　同

同

ことしから子をつれて来る万歳哉　桜夕

御竈の上へ浜弓を置

三日月のおぼろにさハる物もなし

歳旦

元日や麹を洗ふむめの枝　一ノセ一鶏

葉竹四五本鶯の宿

つゝら馬朧の月に明初て

〔四十五丁ウ〕

三物

御代の春酒のまてよしさりなから　一ノセ知扇

去年のかせきの見ゆる銭銀

ちる花を土蔵の壁にぬりませて

同

二朱判や隠居の春に似合敷　同友夕

上をは笠に垣代の梅

庭たゝきひとりひやうしをさへつりて

歳旦

普直りや春の小鮒の横踊　　慥栖竹尤

つとにつかぬる浦の八重梅　　柴筍

江戸調子雪の雫に鬢撫て　　同

〔四十六丁オ〕

同

はこ板や乳母に塵取にやハしき　タシカラ柴筍

梅と伽羅とのふすま立切　　竹尤

木まくらの夢も楽寝の春にして　　同

鶏―旦

初空や物ほしからぬ気に成し　　戸羽梅樹

ひろい処て風とやりはこ

梅白し朝日に染て薫らん

同

若水に笑かほ見す旦かな　　同所吟子

茶の大福ハうはか年玉

ほんのりと鶯鳴は気の延て

〔四十六丁ウ〕

家々賀

とろ〳〵として目の明ははれの春　　盧教

元朝や上下ともにから折敷　　女年未算

とし寄もいそ〳〵したり花の春　　同

同し名の一度に来たる御慶哉　　芦風

来る人や形さつはりと花の春　　案芸

正月や家内のものゝ食いそき　　斎々

下に■てそちもいたゝけ鏡餅　　呂垂

子を抱て嘉例にくるや門の松　　峯松

とし玉や出しはくれて戻りしな　　洞乎

一夜さに打てちかふや四方の春　　竹翁

霞根のひかしハふとしけさの春　　友鶴

〔四十七丁オ〕

海と山二いろ霞む旦かな　　寐覚

正月や気にむいた事して遊ふ　　養老

御城まて禿たる鞍も御慶哉　　望佐

よう肥て烏帽子ちいさし今朝春　　哥両

麦米の直をわすれけり今朝春　　忍古

鶯も鏡に来るやけさのはる　　サント

鶯茶藍よりもこき節衣哉　　又熨

やりはこの中に交るやとし男　　千鶴

うくいすのことしや竹に星の影　　哉勇

松茸をさかした事よたなの歯朶　柳玉
まくらるゝ夜着の中よりことし哉　女年柳子
こゝろもち誰にも問や今朝春　素事

〔四十七丁ウ〕

元日や坐敷掃出すむめの花　女年和風
飛むめや畠に咲て目にかゝる　女年蘭中
年頭や上の町からちとりかけ　云北
元朝や霞のつゝむ日の光　梅之
ミち筋やひろかるやうな日のはしめ　衣彡
今日からやよき香になしむ梅の花　三木
今日からや香もうつくしきむめの花　八ツ
元日やいかゝに見ても下戸ハない　久友
けさの梅あたまにぬくき雫哉　立人春夕
気しつかに茶巾さはきやけさの春　八子
大黒につちを倣ふや夢はしめ　同
鼠にも膳備るや三ケ日　同

〔四十八丁オ〕

今朝や春笑かほ染出すとその役　戸羽梅樹
喰つミに童欲なきこゝろかな　同梅客
元日ハ夫婦中さへ形亘かな　同艶舟

去年より
いとまなき身となりて
結ふて寐し指に跡ありけさの春　一ノセ不夕
水桶の星算るやとしおとこ　同可包
節小袖おとなもおなし笑哉　相可風也
若水や鶴の遠音のいさきよき　タシカヲ如水
鶯も法華経読誦今朝春　僧性且
畳まて今朝あたらしき御慶哉　ミナト尾之
下〳〵も肩て風切御慶哉　同梅信

〔四十八丁ウ〕

歳旦
季―徳ハ也(マタ)珍―客　巨龍
珠ヲハ若レニス礫ノ毬―打　同
門―松家奥―深　同
歳暮
送ルレニ年ヲ資(モチ)ユ宝―舸(フネ)ヲ一　同
す、いた膳の氷る雪風　路友
見たやうな人か馬から飛下りて　同
同
とし〳〵の格て働く師走哉　路友

縦（ホシイマヽニス）目ヲ甲ー頭ー巾　巨龍
雪ハ薄スシ天（ホノ〳〵）ー明ー白（アケ）　同

〔四十九丁オ〕

歳暮

有明の餅におさまる師走哉　呂叟
煤はきの古きゑほしや三番三　未算
小骨ある魚むつかしやとしの暮　廬教
夫婦居れハ何かなうてもとしわすれ　有妻
火桶抱てそのあたゝミをとしわすれ　無妻
うつくしいかほて銭よむ師走哉　起芳
つり髪てうろたへまハる師走哉　白歌
日本はし馬鹿なかほなきしハす哉　寸陰
鴨一羽百匁の酒にとしハすれ　了麁
小坊主か小判をなふる師走哉　逸草
猿引の馬て戻し師走かな　素甫

〔四十九丁ウ〕

よめ入をいそ〳〵待やとしわすれ　呂垂
御簾の内一入さむき師走哉　峯松
餅つきやいろり取まく門のもの　斎々
御とし徳御さらふとあるとしの中　相可風也

梅咲て空あたゝかなとしのくれ　蟻武
隠居へも二日に一度師走哉　桃牛
古筆もかそへられけりとしの暮　戸羽梅樹
一とせの世話やいつくにとしのくれ　同吟子
戸口から礼の埒明歳暮かな　ミナト遊汀
はたらかぬ隠居の金やとしのくれ　同無尤
餅つきや臼本分に二表程　同勉翁
振廻に行隙ハありとしのくれ　友鶴

〔五十丁オ〕

歳暮

正月に見たいかほありとしの市　団友
提て行間に氷る青染　賀枝
鳫鳴八丁縄手風吹て　芦本
あんまり出来た麦に日の照　圭斯
追ついて乗せたかりたる舟の者　万里
最早こゝらハ戸を明る也　洞平
渋柿の遅ふあからむ十三夜　空牙
すたれに巻て木綿とりこむ　執筆

〔五十丁ウ〕

阿叟

急度して八幡大名今朝の春　乙由

銚子〳〵と呼る蓬莱　反朱

先以空も長閑にのとかにて　反止

いもし

さてハ爰伊の字の付た国のはる　同

あなたこなたも門松に成ル　乙由

ころふても何もひろハす長閑にて　反朱

末社神

春の来てやら〳〵目出度い事共や　同

鳥も囀梅も咲けり　反止

岡本も妙見町ものとかにて　乙由

〔五十一丁オ〕

歳旦

松風や吹ほと吹てけさのはる　水甫

田耕子

春にいま成とて梅の朝カ哉　反朱

鍬

鍬の柄に蒔絵せふなら梅の花　涼子

蓑

此形を鳶と思ふなきそはしめ　乙由

笠

とこに居て雑煮を喰ふそ隠笠　涼子

牛

はつ空に牛のよたれやいかのほり　反朱

〔五十一丁ウ〕

昼食

白妙や食のあちらにとし男　反止

留主人

日なかしと昼寝をするや餅の中　乙由

臼

杵になれ臼になれとて子の日哉　唐底

京寺（以下擦れ）